Buddhist Studies in Honour of I. B. Horner, ed., by L. Cousins & Others

櫻部建

この論文集がささげられたパーリ・テキスト・ソサェティ会長ホーナー女史について多くを語る要はあるまい。その略歴や主な業績は巻頭の数ページに紹介されている。寄せられた十八篇の論文はいずれも錚々たる学匠（主として西欧人。欧米在住の三人のアジヤ人学者を含む）の手に成るが、いまはその中、わたしの興味を惹いた数篇のみについて少しく関説することにする。

(1)アルスドルフ(L. Alsdorf)翁はパーリ文ジャータカ第三〇九話およびパーリ律蔵大分別衆学法第六九項に見える興味深い一つの本生譚に着目し、そこ(J iii 29-30, V iv 204)に現われるところの、一婆羅門と一闡陀羅（過去世の菩薩）との対話を内容とする四つの偈について、その本文（JのそれとVのそれとの間にかなりの異同がある）の改訂に独自の見解を提示し、それに基いた新しい英訳文を掲げている。これについては南伝大蔵経第二巻三三〇ページと同第三十一巻三五一、二ページが参照さるべきである。

(2)ハロルド・ベイレー(H. W. Bailey)卿は二十余年前に出されたKhotanese Buddhist Texts の中に含まれていたPradakṣiṇā Sūtra の解説をほとんど各行にわたって修正し、それに基づく翻訳を示している。この経の内容はチベット訳大蔵経に収められるCaityapradakṣiṇā-gāthā (OKC 987. この論文の註記に No. 697 とあるは誤まり)とパラレルなもので、したがって実叉難陀訳「右遶佛塔功徳経」（大正七〇〇）とも関連する。（なお、はしがきの中で、漢訳増一阿含経に承事礼佛の五功徳が説かれることに触れてあるが、その箇処を示して大正巻二、六四七aとしているのは六七四aの誤まり）。

(3)ゲッティンゲンのベッヘルト(Heinz Bechert)氏は、ベルリンのトゥルファン文書の一つ（No. 464, ワルトシュミット目録の第四九番）に含まれる諸断片の中から、パーリ小部のVimānavatthu に対応する一典籍 Vimānāvadāna の写本の一部をなすところのものを見出して検討し、特にそのなかパーリ・テキストでは Vv II 4, 1-7 に相当する箇所を取り挙げて、それを解読し、マニュスクリプトの損傷によって解読不能の箇処はパーリ文との対照などの手段によって復元を試みている。氏によれば、Vimānāvadāna は、Anavataptagāthā, Sthaviragāthā, Pretāvadāna などと共に、説一切有部の第五阿含 Kṣudrakāgama に属するテキストの一つである（Anavataptagāthā と Sthaviragāthā との断片は先にベッヘルト氏によって校訂され、Bruckstücke buddhistischer Verssammlungen aus zentralasiatischen Sanskrithandschriften Vol. 1, Berlin,

1961, として刊行されているが、この Vimānāvadānā も、その他のものと共に、やがてその Vol. 2 として刊行されることが予定されている)。説一切有部の Vimānāvadāna と南方上座部の Vimānavatthu とを比べて見ると、共通の源泉としてより古いテキストの存在が推測されるが、むしろ Vimānavatthu の方が、ジャータカなどから材料を得た後代の附加増広の跡をより多く示している、というのがベッヘルト氏の見解である。

(4)ボレ (W. B. Bollée) 博士は、ジャイナ教白衣派の初期文献に見える佛教への関説、特に佛・法・僧への言及、について論ずる。

Gotama の名はジャイナ原始聖典 Gaṇipiḍaga に見出せない。そこでは Buddha の語は Ar(a)hat, Jina, Tīrthaṃkara (Titthagara, Titthaṃkara) などと同じく、普通に、解脱した人の尊称として用いられる(それが特に佛教の佛陀を指して用いられていると見られる箇処は多分ただ一度である)。しかしマハラーシュトラ語、プラークリット語、ジャイナ・サンスクリット語などで書かれた post-canonical な典籍、註釈文献などになると、Buddha の語が明らかに佛教の開祖を指して用いられ、それはまた「シュッドーダナの子」という言い方でも表わされるし、Śākyamuni あるいは Sugata という呼称も見出される。

ジャイナ原始聖典は「五蘊」の語を挙げて佛教の無常説に言及する (Sūyagaḍa 1, 1. 1. 17)。「輪廻は無始無終 (? Pāli: anamattagga = an-avara-agra ?)である」という佛典の句(S ii 178[8], Divyāv. p. 197)を引用する。佛教を「業」否定論(akiriya-vāda !)と見る。また、佛教の「空」の観念についても知っていた痕跡がある。註釈文献に至ると、佛教に対して Buddha-śāsana, Sakka-darisaṇa (Śākya-darśana), Sugata-mata などの呼称が用いられており、そこに見られる佛教教義としては、無常説を極端に押し進めた諸法刹那滅の論や、無我説から導き出される業否定 (!) 論などが、批判の対象とされているのが目立つ。「空」思想に触れては、龍樹の中論偈をも一註釈は引用している。

saṅgha という語も、ほかに佛教者一般を指すことばも、原始ジャイナ経典には見えず、ただ佛教徒をも他のグループをも含めて akiriyavāin (akriyāvādin) の呼称が用いられているのみである。註釈文献になると、そのような一般的な呼称として aphalavādin も用いられるほか、特に佛教徒を指して Boddha (Bauddha), Khandhamettiya (Skandhamātrika), Taccaṇiya (Tātkṣaṇika), Śauddhodaṇīya, Sugatamatānusārin などという呼び方がされている。僧伽の成員は Bauddha-bhikṣukāḥ, Sugayasīsā などと呼ばれる。舎利弗・目連の名すらかなり古い文献の中に登場するのである。

(5)ジャイニ (P. S. Jaini) 氏もまた、一切知者性ということについてジャイナ教祖マハーヴィーラの場合と釈迦牟尼佛陀の場合とを比較して論じている。

原始佛教と原始ジャイナとの比較研究は、非常に重要なそして好個の研究課題でありながら、わが国では全体としてむしろ

看過されて来ているようである。右の二篇の論考はその意味でたいへん示唆に富んだものと言えよう。

(6)般若学のコンゼ(Edward Conze)博士はチベット訳大蔵経丹殊爾に含まれる般若心経の一註釈（北京版では五二二一番、影印北京版九四巻、二九二—二九六ページ）を紹介する。博士によれば、この釈疏は経の本文の意味をよく解明しているが、中観派の立場を主とし瑜伽行派の言葉遣いをも含み少しは密教風でもあるという点で、パーラ朝佛教の思想傾向を鮮かに代表するものだ、という。

(7)ラモート（Étienne Lamotte）師の論文は煩悩とその習気（それを師は impregnation or latent odours という表現で示す）に関している。分別説部や化地部の説を承けて、大乗佛教は主張する——声聞・独覚は煩悩を断じていてもなおその習気を存するが佛はあらゆる煩悩の習気を滅している、と。そのことは大衆部や大乗においては不共佛法の一と解される。いかにして佛のみにそれがあるか。佛のさとりは無上正等覚であって声聞・独覚のさとりと類を異にするからである。また、佛は過去世に、菩薩として、無数劫に亘って行を重ね徳を積んでいるのに声聞・独覚の過去世の行はせいぜい三生に亘るに過ぎないからである。大乗佛教は、また、菩薩がその修道の過程の中のいずれにおいてすべての煩悩を断じ、いずれにおいてその習気をも滅し去るか、という問題を追求する。大品般若によれば、菩薩が煩悩を「転」ずる(vi-vṛt)すなわち「断」ずる(pra-hā)のは第七地においてであり、彼は第十地に至って一切種智を具足し一切の「煩悩及び習」を断じて「佛の如く」である、とされる。第七地における煩悩の「転」は第八地において得無生忍住不退転として成ぜられるが、大智度論によれば、菩薩が無生法忍を得てその煩悩は已に尽きても「習気は未だ除かれぬ」から、かれはその「習気の受」によってよく自在に化生し、衆生に対する大慈悲をもって世間に還来する。第十地に至って一切智・一切種智を得てはじめて「煩悩の習を断つ」のである。

大乗におけるこのような新しい教理学の展開を、しかし、原始佛教教義の〃改革〃などと考えるべきではない、とラモート師は主張する。大乗の論師たちは“took constant care not to assert anything which had no justification, direct or indirect, in the ancient canonical Scriptures”であるという師の言葉はわれわれに三思をせまるものではなかろうか。

(8)ラーフラ（Walpola Rahula）氏は dharmatā という語の用法や意味を検討する。この語が本来存在論にも目的論にも認識論にも関係なくて、「習慣」、「しかた」、「本性」、「あり方」などを意味する日常用語であることが強調されている。

(9)リュエグ（D. S. Ruegg）氏が論ずるのは、かつて高崎博士が追求した（金倉記念論集、日本佛教学会年報第三十二集）問題と揆を一にする。すなわち、パーリ聖典の何箇処かに見え、パーリ語としては特異な語形をもつ gotrabhū という語句に注目し、それおよびその類語の用例の展開の跡を辿って、大乗の経論にまで至るのである。氏はパーリ語聖典を奉じた上座部の教学説が、サンスクリット語聖典を奉じた北伝の部派や大乗のそれと

けっして無関係でなかった点について、注意を喚起している。

⑽ウェイマン（Alex Wayman）教授は中有の問題を論ずる。中有の存在を認める説一切有部・正量部・犢子部らと、それを認めない南方上座部・大衆部・舎利弗阿毘曇論らとがある。ウェイマン氏は二つの立場のそれぞれの所論を摘要して紹介するが、氏が中有否定論のポジティヴな表現であるとして引く勝鬘経（氏によればこれは大衆部の所産）の一節（影印北京版第二四巻二六〇―四）はわたしにはあまりそうとも思えないし、龍樹が中有否定の立場に立つことを示すとして引かれる文章も必ずしもその意味にとらるべきかどうか。氏の主張する十二縁起支の無明と行との解釈と中有論との関連もわたしの理解を越える。佛教の中有論とウパニシャッドの所説との関係などについて教えられる所はあるが、われわれは、たとえば望月大辞典の「中有」の項などを参照することによっても、中有およびその存否の論争について氏の所論以外になお多くを知り得るのである。なお、ウェイマン氏がサンスクリット原文および翻訳を掲げている瑜伽師地論声聞地の一節は、そのまま、玄奘訳にして巻二六の一部（大正三〇・四二五a）に相当する。

（Dordrecht/Boston, 1974, xi+239 p.）